

「お気に召すまま」演出家の一私論

水田晴康

早稲田の仲間達の同人誌に「ロミオとジュリエット」私論を、ゼフィレッリ監督の映画から書き始めたように、「お気に召すまま」も映画をきっかけに考えたい処だが、手許にはドイツ人の監督パウル・ツィンナーがエリザベート・ベルグナー、ローレンス・オリヴァエ主演で撮った戦前の古い映画しか無い。

「夢見る唇」、「逃げちゃ嫌よ」で神経症的な鋭い名演技を見せたあのベルグナーも、此処では何だかカマトト演技で戴けない。但し英語が苦手のドイツ人の彼女の喋るシェークスピアの台辞は、いとも日常会話風でそれはそれで軽やかで十分面白いのだが、相手役のオリヴィエの本場仕込みの舞台の台辞術とは全然噛み合っていない。シェークスピア作品の

映画化で我々が期待するのは、監督の独自の解釈による見事な映像化と、俳優達の生き生きとした奥行ある新鮮な演技であるが、その点此の映画は食い足りない。

せめて一九五〇年の冬、ニューヨークはコート劇場でキャサリン・ヘップバーンが見せた伝説的な素晴らしいロザリンドで映画化されていたらと思わずにはいられない。シェークスピアが造型した女性像の中でも特に魅力的なロザリンドを演じ切るには、ヘップバーンの如くハリウッドに毒される事なく個性と風格を備えた女優、しかも自立した女として男と対等に渡り会える彼女でなければ此の役は勤まらないからである。

ならば今回はテキスト中心に考察をしなけ

ればならない。(文中の数字は新潮社版、福田恆存訳の場割の通し番号による)一場から十一場ではフレデリック公領の町とアーデンの森が交互に転換されるのに、十二場以降では終始森の中で進行する。これでは場面の構成上どうもバランスが悪い。クイラ・クーチが指摘する如く「作者は一刻も早く森に着くべく筆を走らせた」のだらうか。ジェイクスやフレデリック等の役名の重複といった小さな瑕瑾はまみ見られるが、芝居の裏表を熟知した座付作者のシェークスピアの天才が、大切な場面構成を蔑ろにする筈がない。

それにバランスの悪さは場割だけではない。前半一場から十一場と後半十二場から二十二場の雰囲気の違い。前半のオリヴァー

とオーランド兄弟の不仲、現公爵と追放され

た公爵のこれ又兄弟の確執。ロザリンド、オ

ーランドの二つの逃亡……と暗い場面が続く。

それに比べ十二場以降の陽気さと来たら、登

場人物全員がタッチストーンの影響かまるで

道化そのもの、駄洒落を連発し、挙句は恋に

現を抜かす有様。主役のロザリンドにしても

前半は忍耐強く理性的な女性に思えたのに、

後半では恋人をからかう蓮葉な女、かと思え

ば恋人の不実を嘆く感傷的な乙女に変貌。オ

ーランドも上昇志向の凛々しい正義の若者が、

恋の奴になり果てている。これこそが恋だと

は云うまい。クイラ・クーチの二の舞になる

から。ラブロマンスを書く心算のシェークス

ピアなら、二人の最初の出逢いをもう少し丁

寧に書き込んだ筈だし、あのまま二人を別れ

させる事なく、もう一度お互いの胸の内を確

め合う場面を加えたに違いないのだから。

では此の雰囲気の違いは、権謀術数が渦巻

く町と、何の類いも無い理想郷たる森の、俗

と聖の対比から来るのか。否、現世のアルカ

ディアである森にも羊飼コリンの云う如く

「私の主人は業つくばりの男でして、天国へ

いるのではないか。

原因は他に有る。劇中の歌を見るがいい。

緑なす木蔭に 我と坐し楽しき歌を

鳥の音に合わせ唄わん

人あらば 来れや来れ いざ来れ

この敵なく 仇なき国に

仇なすは

たゞ冬空の 寒さのみ(八場・アミアンズ)

好いた同志が肩並べ

へイ・ホウ・へイの へイ・ノニ・ノ

青い畑を行ったとき

春は契りの季節なりや

鳥も囀る へイ・チュ・チュ・チュ

好いた同志は春が好き

(二十一場・タッチストーン他)

答えは単純明快、季節が冬から春に変わった

けである。人間の本性を見透す皮肉で強かな

リアリストのシェークスピアは、季節が変わ

るだけで、それまでの対立や葛藤は暫くおあ

ずけにして、恋に浮身をやつす人間の他愛な

さを見詰めているのである。

これですら疑問が氷解する。一場の果

樹園の葉の落ち切った黒黒とした幹の色、今

にも雪が降り出しそうな冷え冷えとした空の

色。二場の芝生も霜枯れているに違いない。

四場に於ける追放された公爵の有名な述懐に

しても、御本人が寒さに震え鼻水を垂れ流し

ているとなれば、静謐な森の生活の自画自讃

も負け惜しみに聞える。傷ついた鹿に涙した

森の哲人ジェイクスさえ、十七場では獲物の

鹿を担いで馬鹿騒ぎするではないか。

こうして後半十二場以降の全員が道化に変

貌する意味合いも明らかになる。そもそもタ

ッチストーンとは試金石の意。登場人物の一

人一人が他の人間の実態を写し出す鏡として

の道化に変貌するのだ。観客にとって舞台が

己れを写し出す鏡である様に。知ってか知ら

ずか、十場でジェイクスはいみじくも云つての

ける。「全世界が一つの舞台」と。そして忘

れてならないのは、生まれながらの演劇人、

骨の髄まで芝居屋のシェークスピアの飽く事

のない人間への興味、許し難い程の皮肉屋で

人間の恥部を露わにしてしまう冷めた視線の

底に、愚な他愛ない人間一人一人を愛おしむ

ような作者の優しい目差しのあることを。

さて演出家は先ず具体的に、冬から春への

季節の移ろいを十一場と十二場の一瞬のうち

に、舞台の機能を駆使してどう表現すればい

いか、ゆっくり愉しみながら考えることにし